隼人族の森を渡る風

上床 利秋

連載エッセイ　第 106 回

海へ
～ 種子島の想い出 ～

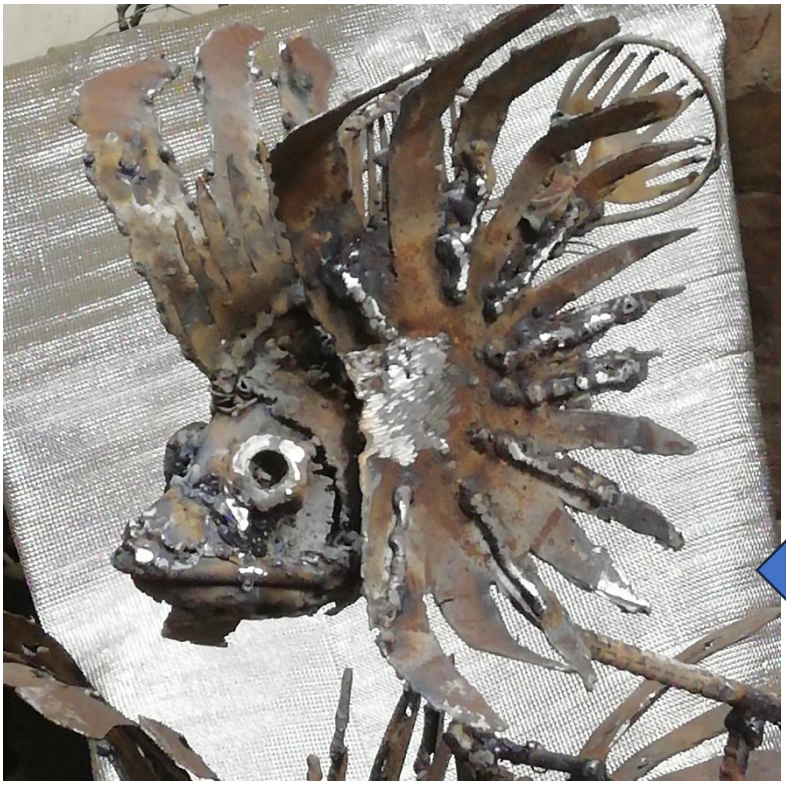
私が二十歳代の頃の思い出に、シュノーケルを使って海に潜っていたことがある。

種子島の夏の浦田海水浴場はそれこそ、トロピカルビーチと呼ぶに相応しい自然の豊かな美しい海岸だ。海の中はテレビやインターネットで見聞きするイメージ通りではあるが、やはり自分で潜ってそれを体験する楽しさは格別だった。

海で出会った生き物の一つにミノカサゴという魚がいた。海の中では巨大に見えたのに、網で捕えてみると毒があるというヒレばかりが大きくて、食べるところなどほとんどない。

だからこそ、この魚は岩場の陰でのんびりしていたのだろう。きっと、天敵も少ないのだ。それで、ダイビングが素人の私にとって、網で捕えられたのはこの魚だけだった。

そういう縁でミノカサゴの形や習性を知ることが出来た。とても愛らしくて、ボーっと泳ぐ姿を今でも思い出す。

出会ってから四十年、大きな鉄のヒレを持つ魚の作品として溶接して彫刻したミノカサゴ。そんな若い頃の懐かしい想い出がある。

２０２５年10.月